ぬ者なく出言耳に逆らわず迎降之をゆきは
不思議の言葉式和歌の道を元来家のなりたち
らず一色秘の者に附属しうべきたるをけまでも一旦
主従の礼を重んじ苟も身命を投打ち忠節を
立つる所に近藤が好邪に陥てられ湯部の時も
りの痛りさよ和歌とらべも打解け後に弐
死なべきとて有所安堵申合の用心
をもとめ敵の寄手となりて勝軍地蔵院を拵
備しけるが無念の餘に手負をもとめと流れ
豊で延藤が運を開くべき過去の宿因の前ゝ
此事なるへはなるべ時ふ今にて城の
勢を望みなるまでも將兵を伝て迎門数日を
送りける

義光智謀兵能登守降参之事

世の譏に夫用兵道政心為上攻城為下心戦為上